

[研究論文]

房総里山芸術祭 いちはらアート×ミックス

—地域の先進性とアートの後進性の擦り合わせ—

Reflecting on Ichihara Art × Mix

—Negotiation Between Progressive Local Visions and Nostalgic Art—

村山にな

MURAYAMA Nina

〈抄 録〉

千葉県市原市を南北に走る小湊鉄道沿線地域の南部で繰り広げられる「いちはらアート×ミックス」を事例に、既存の市民活動とアートプロジェクトを比較し、地域におけるアートの真価を問う。地方の芸術祭における新規作品展示の再魔術化と運営合理化の連鎖と、ノスタルジアを媒介とする来場者と地域の共犯と相反関係の錯綜を示唆する。内外から見えてくる市原市の芸術祭は身の丈で、アマチュアとプロの境なく、大規模な恒久作品もないが、専門用語で飾った言説で市民を疎外するものでもない。過疎化する地域に出現するアートに対する期待と現状の齟齬を擦り合わせ、まちづくりのビジョン形成と共有化、具現化の試行錯誤におけるアートの役割を考察する。

キーワード：芸術祭、パブリックアート、再魔術化、ノスタルジア、まちづくり

Abstract

This paper investigates the process of the localization of international contemporary art exhibitions onto Japanese soil. The negotiation between the foreign idea of fine art and traditional art forms is discussed while paying attention to the political and cultural dimension between the city and country. Cultural attractions of reenchantment and nostalgia offered in the countryside are an undercurrent in *geijutsusai* (international art festival). The case study at Ichihara Art × Mix suggests that the collaboration of local businesses, the government, and non-profit organizations can be a model to move nostalgia to more forward-looking visions and civic actions.

Keywords: *geijutsusai*, public art, reenchantment, nostalgia, revitalization, *satoyama*

はじめに

芸術による地域づくりを掲げる芸術祭が増えつづけるなかで、2000年から先陣を切ってきた大地

の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレは、2018年で7回目の開催となった。ベニスビエンナーレやドクメンタなどの先行する都市型の現代アート国際展覧会とは異なり、地方の里山や古民家、廃校などを舞台に作品が点在する日本独自の発展を遂げている。2017年度に改正された「文化芸術振興基本法」には、観光とまちづくり、国際交流や産業との連携を図る新たな項目が加えられ、日本各地における芸術祭のあと押しとなっているが、出展されるアートをめぐる美術批評の欠如が指摘されている¹⁾。市原市は、千葉県の中央部に位置し、東京湾に面する工業地帯と内陸部の里山に分かれ、これをつなぐように小湊鉄道と養老川が南北に走っている。(図1) 千葉県市原市が主催する「中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス」は、人口減少の危機感を抱える南市原で2014年度から地域振興の一環で開催されている。内外において芸術祭の知名度はまだ低く、予算規模でも市原市の単独事業として初回予算総額は4億2,983万円、2回目の歳出総額は約1億4,803万円である(いちはらアート×ミックス報告書2014、2017)。特徴として、既存の市民団体の存在がある。芸術祭の前から里山を守る市民団体の取り組みが活発で、沿線地域が一体となった里山環境整備を評価され小湊鉄道は「2017年度グッドデザイン賞」を受賞している。本稿では、市民の参加を求める現代アートの動向とその美術批評を踏まえ、市原市市役所の芸術祭担当者と地域リーダーへのインタビューと出展作品をもとに分析する。地域における芸術祭であるため、まず市民活動とアートプロジェクトの相違を明らかにし、双方の擦り合わせを作品づくりからも探り、身の丈にあったまちづくりとアートの相関性を考察する。

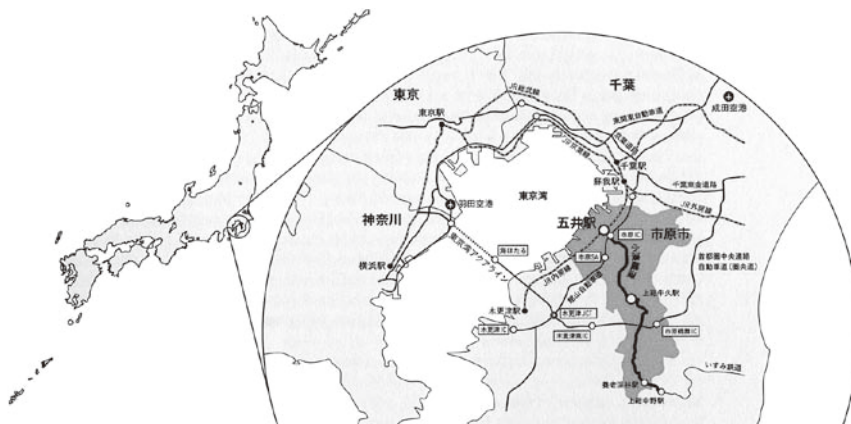


図1. 首都圏における市原市
出典：『中房総国際芸術いちはらアート×ミックス2014』

1. 市民の緑化活動とアートプロジェクト

いちはらアート×ミックスは、千葉県市原市の小湊鉄道沿線の駅周辺に点在するアートギャラリーの活動が契機となり、当時の市原市市役所の経済部幹部と市原市水と彫刻の丘館長らがアートフロントギャラリー代表取締役の北川フラムに相談し企画された²⁾。また、市原市鶴舞地区には銅版画家の深沢幸雄を始め多くの文化人が在住した歴史がある³⁾。水と彫刻の丘⁴⁾では、子供の絵画展などの地域に密着した展示企画によって、家族で賑わう場を創出していた⁵⁾。しかし、初回芸術祭では総合ディレクター北川の指示のもと、絵画、陶芸、書道を除外して作品選定がおこなわれ、開催の原動力となっていた地元のギャラリー、工芸会や写真会との連携は絶たれるという不和が生じた。近現代美術史の観点では、「なんでもアートになる」と「絵画、陶芸、書道はアートである」は同意ではない。市民一般に親しまれる古典的な表現媒体には既存の「型」があり、現代アートはそれをつき崩す革新性を

追求するため食い違いは避けられない。芸術祭の統括を委任される側には、美術批評に備える責務がある。一方、住民の参画と地域づくりが芸術祭の前提であれば、現代アートの真価と地元美術愛好家のこだわりとの擦り合わせが求められる。地域リーダー深山とのインタビューによると、ディレクターとの交渉によって、新聞社の勤務経験のある地元写真家の作品はようやく加えられた⁶⁾。

個の表現の追求であるアートの定義は多様でありつづけるが、地域住民と作家はともに、人の手が加えられた里山は美しい風景作品になり得るという美的感覚を共有している。いちはらアート×ミックスの開催以前から「花プロジェクト事業」が地域活動団体と市民によって支えられ、年間を通して小湊鉄道の沿線に菜の花の種まき、種集め、土起こし、草刈りが実施され牧歌的な風景を作ってきた⁷⁾。菜の花と桜の咲く頃は来場者で賑わい、花プロジェクトを支える市民にとって、アートよりも花を見に来る人の方が多いとの自負もある⁸⁾。そもそも、地域づくりに関わる作家と住民の活動の違いはどこにあるのか。例えば、市原の住民が奉仕する「菜の花の種まき」は、ドクメンタ7（1982年）に発表されたドイツの現代アート作家・社会活動家・教育者ヨーゼフ・ボイス（1921-1986年）の《7000 Oaks（7000本の樫の木）》と、どのような差異があるのか。両者ともに、地域の緑化へ行動する市民を育てる道徳的かつ社会的な価値観で一致している。南市原には、小湊鉄道によって自然につながれ育まれてきた共同体意識が基層にある。一方、ボイスのプロジェクトは作家のカリスマ性と結びついた「表現」であり続け、作家個人のキリスト教精神に基づく理想的コミュニティーの構築が隠喩されている⁹⁾。

ボイスの《7000本の樫の木》では、ドクメンタ7の会場フリデリチアヌム美術館（Museum Fridericianu）前に一本の樫の木が植えられ、そばに7000個の玄武岩が山積みされた。個人または組織がこの石と木の対を購入し、一つの石の隣に一本の樫の木をカッセル市内に植える権利を得る都市緑化プロジェクトであり、奉仕活動へと個人を啓発することを目論む「ソーシャル・スカルプチュア（社会彫刻）」である。文芸評論家のマイケル・ノースは、これらの石にボイスがキリスト教の大聖堂を築く宗教コミュニティーの理想を重ねているが、大衆を画一的な行動に誘導するナチズムの集団スペクタクルとの危険で曖昧な類似性を批判的に分析している¹⁰⁾。実際に、石を購入するための主な資金は、ボイスの私財、Dia美術財団などから捻出され、地元の市民からの積極的な参画は得られたとは言い難い現状があった¹¹⁾。しかも、公共の場であるプラザを占拠した玄武岩の石は、カッセル市民の若者らによってピンク色の塗料をかけられる破損行為を誘発し、皮肉にもボイスの意図に反して、市民の純然たる善行の啓発よりも反權威の表出を触発し、その後も市内に設置した石と木の損失が報告されている¹²⁾。

ボイスの《7000本の樫の木》に参画すると、ボイスの主催する大学（Free International University）からTree Diploma（樹木修了証書）を得る¹³⁾。一方、小湊鉄道沿線の里山環境の整備に尽力してきた有志との協力関係が評価されて、小湊鉄道株式会社は2017年度グッドデザイン賞に選ばれ、勝手に沿線に木を植える「勝手連」と自ら称する市民はともに榮譽を得た。鉄道沿線の里山の整備は、無償の労働奉仕であり返礼を求めない。南市原の植樹や種まきは、勝手に始めた以上、勝手に辞めても咎められない自由な行為であり、他者にも強要できない行き先の不確実性がつきまとう。しかし、この無償の善行は、地元企業の小湊鉄道が養老溪谷駅前のアスファルト舗装を撤去し、植樹し森に戻すという「逆開発」ビジョンを形成する相乗効果を生んだ¹⁴⁾。作家ボイスと市原市民、究極的な目的は一致していたが、それぞれの立場で行動した結果は異なる。

ボイスが先導した植樹は、目論んだ市民活動を生まなかつたが、賛否の議論を巻き起こし後世の作家たちに影響を及ぼした。予期せぬボイスの死によって未亡人と息子がプロジェクトを引き継ぎ7000本目の植樹を達成し、“緑化活動”は鎮魂と作家の英雄性を印象づける“アート作品”として昇

華された¹⁵⁾。ボイス個人の善意と独断の末路は、市民の参画を前提とするアートプロジェクトのあり方と進め方に示唆を与えている。一人の作家が公共の場を占有する行為は、住民の反感を招きかねない。しかし、アートと市民間に軋轢が生まれることは、悪いことではない。作品をめぐる自由な言説の場や、広く市民に開かれ意思表示する機会がなければ、地域のなかでアートは存在しないと同然で疎外され自然淘汰されていく。小さなことでも地域の住民にできること、作家にできることを擦り合わせる作業は、当事者を巻き込み地域に根ざした芸術祭につながる。「アートいちほら2016春」では、作家中崎透のディレクションで、地元作家の盆栽やチェーンソーカービング、写真の展示が旧里見小学校で企画された。住民が育てた盆栽を、作家が「里見の森」と見立てて小学校の備品を活用したインスタレーションを担当した。教室の黒板には盆栽を提供した里山連合会による以下の文章が、国語の授業時の美しい楷書体で綴られていた(図2)。「アーティスト中崎氏の里見小の備品を用いた構成に三名の盆栽を並べて『里見の森』を表現しました。◎中崎氏は全体を見た後に個々の作品を一つ一つ鑑賞し目を外に移し里山と一体となった新しい盆栽展を評価して欲しい」とのことです。」作家と地域住民が「見立て」の美意識を共有し、丹念に育て上げた一本の木から着手する作品制作のプロセスは、一人の作家の強引な先導を必要としない。人の手が加えられた盆栽を再び山の自然のなかに還するがままの発想は、小さな共感を呼ぶ。



図2. 中崎透と里山連合会《盆栽展 里見の森》アートいちほら2016年春 5月3日～8日 撮影：筆者

2. 芸術祭における再魔術化の連鎖

小さな共感は、えてして大きな集客には直結しないためか。いちほらアート×ミックスを応援する地域リーダーたちは、何か目玉になるもの「アート」があればと願っている¹⁶⁾。芸術祭の根幹をなすのは、南市原を横断し人々をつなぐ小湊鉄道である。地元住民に愛されるローカル線は主要な芸術表現の場となり、列車と駅舎を飾り、彩り、賑わすことに期待が寄せられる。列車に揺られる旅は、芸術表現になぞらえられ、行く先々で目にする、耳にする、味わう、香る、触れるなどの未知なる五感体験へと乗客を誘う。初回のアート×ミックスでは、指輪ホテルによる演劇作品「あんなに愛しあったのに～中房総小湊鉄道編」が上総牛久駅と上総大久保駅間の車内外で上演された。また、月崎駅に隣接する小湊鉄道の元保線詰所は草花で包まれ、森の中の音をリアルタイムで届け人と森を繋ぐ《森ラジオステーション》となった(図3)。地域住民からの希望で《森ラジオ》は芸術祭終了後も“レガシー”として残されることになった¹⁷⁾。作家の木村崇人は、住民によって立ち上げられた保存会を「森遊会」と名付け、山草に詳しい地元会員と協力し小屋を取り巻く草を摘み食べるワークショップ「森ラジオを食べる」などを実施している。芸術祭を機に小湊鉄道沿線の駅前に水洗便所が新設され、なかでも

建築家藤本壮介が作品として手がけた《Toilet in Nature》は通称「世界一大きなトイレ」で話題になった（図4）。小湊鉄道が所有する敷地内に出現したガラス張りの直方体を木製の塀がゆったりと取り囲む。地元の人にとってそれは駅付帯設備であり、南市原を代表するアート作品というよりも一つのユーモア作品である。市原の地元住民がアートに求める「なにか」とは、有形なのか無形なのか想像することは難しく、失われた活力を取り戻す幻想と魔術性を帯びた響きさえ漂う。地方で行われる芸術祭には、廃校や古民家が作品展示によって息を吹き返す“蘇り”が隠喩されているため、自ずと作家はこのアートの魔法に加担することが暗に仕込まれている。



図3. 木村崇人 森ラジオステーション×森遊会 いちはらアート×ミックス2014年 撮影：筆者



図4. 藤本壮介《Toilet in Nature》いちはらアート×ミックス2014年 撮影：筆者

空き家と廃校は、人口減少と経済活動衰退の暗い現実日々向き合わされる負の地域遺産であるが、芸術祭においては、作家の作品を恒久的に設置する表現の場としての新たな機能を果たし、展示空間として集客を担うプラスの地域資源へと再生される。これは概して訪れる日本人にとっては、慣れ親しんだ学校建築や古民家で過ごした昔の記憶がよみがえり、新奇なアート体験へと刷新される魔法のような錯覚を印象づけることになる。この魔術性は、合理的で直線上の時間感覚を覆し、感情にうったえかける魅惑的な演出をとともなう傾向にある。これを、消費文化に埋没するアートの安易な「商品化」と「消費」と批判する声もあるだろう。個人の願望や欲求は、商品そのものの入手によって満たされるわけではないことを市原市牛久の深山文具店長は、「テレビで話題の文具を取り扱ったが、売れない。消費者にとっては、どこで買うかに意味がある」と語った¹⁸⁾。近代に資本主義の根幹が生産から消費へと移行する過渡期に、消費体験における感受性や空想を喚起するロマン主義的な個人消費者心理と消費構造の「魔術化」は、大規模生産の合理主義に代表される「脱魔術化」と同時進行していた¹⁹⁾。さらに、ジョージ・リッツアは、現代の集客産業において定期的に繰り返され続ける施設の改装や新

規の催し、見世物などによる「再魔術化」は、徹底した経営の合理化によって支えられていることを指摘した²⁰⁾。集客を目指す地方の芸術祭は、来場者が現代アートによる空き家と廃校蘇生のドラマ性へ幻想を抱きつづける限り、繰り返される再魔術化の道をたどることになりはしないか。誰もが楽しめる空間演出性の高い現代アート作品は、広く一般にうったえかける効果を発揮する一方で一過性の連鎖に陥ることも否めない。

地域を舞台とする芸術祭は、巨大な集客展示装置産業とは異なり、地域の歴史と文化に根ざした内容によって知識を広げ、深め、楽しむ機会や新たな試みに挑戦する自由な発想と探求の場を産む地域づくりと人材育成の一端を担っている。南市原で活躍している地域リーダーは、美術科教員だったギャラリー夢心坊（ゆめしんぼう）の新保夫妻や国語科教員を勤めた松本などの人を育てる職務に携わってきた人材が目立つことも興味深い。また、内田未来楽校は、地域住民と支援者が協力し「報徳の会」を2013年に立ち上げ、買収した木造校舎を拠点に地域楽習プログラムを自主企画運営している。芸術祭と地域学習（楽習）の連動は、地域コミュニティーの持続性を支える人材育成の仕掛けにもなる。

初回2014年のいちほらアート×ミックスでは、市原市の担当職員たちにとって未知なる芸術祭運営であり、作品の選定と制作を経験豊富なアートフロントギャラリーに一任する形式となった²¹⁾。タイトなスケジュールと予算管理のもと、作品制作の現場を支えるのは、同ギャラリーの企画制作とボランティアの作業員であった。大掛かりで技術的な工夫を要する作品を実現するには、多くの制作スタッフが必要だが現場の人手不足は深刻である。主催側の市原市役所の役割は、広報活動や地元住民、使用施設、交通機関とコンサルタントの橋渡しの役目を担うことになる。しかし、初回のアート×ミックスでは、作家と展示場所の組み合わせの全体像の完成は、開催の3ヶ月前であったため広報活動と周知が徹底できずに、予測来場者数との大きな隔たりも生じた²²⁾。

住民はどのように芸術祭に関与しているのか。いちほらアート×ミックスでは、松本は芸術祭への協力を惜しまない体制で、作家が5人集まれば食事を振る舞う、急に人を集めて欲しいと請われて教え子たちに呼びかけたり、作家EAT&ART TAROが企画した《おにぎりのための運動会》の「校長先生役」を引き受けたりと積極的に参画し応援してきた。松本は「現代アートは面白いもの、田舎で見る機会はないもの…よくわからないけど、小学校が廃校になってなくなるよりも良い」との率直な意見である²³⁾。劇団員に宿泊施設を提供し交流を育んだ深山は、「劇団員が[南市原を]とても気に入ってくれたことが嬉しかった」、アート×ミックスがなかったら「下北沢の劇場に行くこともなかった」、「牛久商店街のクリーニング屋さんによると営業で家を回ると、芸術祭の後に皆の話の内容が明るくなったことに気づいた」、「関わった人はプラスに感じているが、参加できなかった人から文句が多い」と語った²⁴⁾。両者ともに芸術祭の応援団であるが、共通しているのは、南市原の住民にとって小湊鉄道は故郷の原風景に刻まれ、地域への帰属心を養う道標となっていることである。

地域住民は作家と交流し、作品に登場することもあるが、まずは作品の受け皿となる自然環境の整備、作品に用いる素材の調達、空き家の提供、期間中の作品へのアテンドや作品の維持管理などの協力が求められる。しかし、人口減少と高齢化が加速するなかで、この地域による支援体制は維持できないため省力化、合理化せざるを得ない。再魔術化を担う新作には、地元由来の素材である土、水、樹木などの有効活用やボランティアを巻き込む作業が経済上の得策かもしれない。しかし、地域の同じ素材や自然資源が繰り返し使用されると、作品の見た目、展示手法、内容もマンネリ化を免れない。地方の里山に繰り広げられる芸術祭が抱える再魔術化の連鎖と人材不足の課題に、いちほら×アートミックスも直面している。集客のための作品制作の合理化には、インスタグラムを席卷する作品の新奇性を追う来場者も少なからず関与してきたのではなろうか。芸術祭の継続には、この再魔術化に加担する地方と都市の共犯関係から目を背けるわけにはいかない。

3. ノスタルジアからの脱却

交流人口の増加が目的のひとつにあげられている地方の芸術祭では、都会と田舎の政治、経済、心理的な関係性が焦点となる。地域を訪れそこでの体験をもとに制作する作家は、かりそめにも民俗学者として研究の視点が求められる。美術批評家ハル・フォスターは、安易な民俗学者としての作家が、訪問地で社会的に優位に立つことを批判的に検証もせず他者と表面的に接することは、部族や民族の歴史に光をあてることもなく、一人ひとりの私的な記憶を明らかにすることもないと厳しく指摘している²⁵⁾。近代における都市の発展と拡大は、田園から街へと人口移動をひきおこし、貧しい農村と豊かな都会の対称の構図を生んだ。しかし、高度成長期の終盤となると観光産業や政府の地域活性化施策などによって、風光明媚で実り豊かな田舎の再発見と都市の窮屈な生活環境の現実に対する逆転の視線が生まれた²⁶⁾。

ノスタルジアとは、西洋の産業革命後に徐々に文明が衰退していく悲観的な歴史観をとめない、取り戻すことのできない過ぎ去りし時に思慕の念を抱く感情を指す²⁷⁾。それは、1960年代1970年代の米国では自然志向や有機農法、歴史建造物の保存活動などに代表される文化現象としても表出したが、単に社会不安と変革への恐怖によって歪められた歴史観にすぎないとの批判もある²⁸⁾。ノスタルジアは、社会における集団意識としてのアイデンティティを再構築する諸相の一端でもあり、個人の私的な領域にも存在する。

日本の都市に居住する地方出身者が抱く故郷への郷愁は、多かれ少なかれ綿々と深層心理にありつづけるであろうが、国内観光との結びつきは1970年代の日本国有鉄道が企画した広報キャンペーン「ディスカバー・ジャパン」にはじまる。それは1980年代のバブル期に「エキゾチック・ジャパン」へとつづいた。輸入言葉に適用される片仮名での表記「ジャパン」によって、日本を他者化・異国化することで、新奇なまなごしを自己に向ける国内観光の振興がねらいであった。豊かな発見に満ちた地方を隠喩する広報戦略は、はからずも後に地方に展開する芸術祭の布石となった。倉石信乃によると写真家の中平卓馬は、ディスカバー・ジャパンに表象された中央の支配的な地方への視線と政治性を隠蔽するツーリズムの広報に異を唱え、パロディの写真作品をとおして権力の所在を訴えた²⁹⁾。例えば、現在も都心からの来場にとって、越後妻有トリエンナーレの開催地の広大な田園地帯を横断し不気味にそびえ立つ巨大な送電線の鉄塔は、地方からもたらされる電力で都市が成り立つ一極集中の経済格差を今日も印象づけている。

芸術祭の来場者は、何をもともとめて田舎に行くのか。文化観光に共通するのは、知的好奇心を充足させることにある。文化観光に第一に求められるのは、真正性、ホンモノにふれる経験である³⁰⁾。これは、より深い異文化理解、自己の発見が帰着点となるが、ジェニファー・クレイクが指摘するように、現地の文化と人に対して、純粋な土着性や真実らしさを求める妄想をはらむ手前勝手な「自分本位の旅」でもある。つまり、来場者・観光客の経験は、訪問先の現地が提供する文化や情報ではなく、その前にすでに得た知識や期待、空想、先入観によって形成される³¹⁾。都市から離れた田舎に赴く来場者は、自己の過去の経験を投影させつつ里山をめぐる。そこには、集団的記憶としてのありふれた日本の地方にある祖父母の家に行く夏休み、あるいは小・中・高等学校の林間学校や臨海学校などの思い出が喚起される。また、若者と中高年にとって、旧小学校の建物を会場とする芸術祭は、懐かしく、敷居が低くて入りやすい雰囲気の中で現代アートを身近に感じられる効果もある。里山の自然に親しみ、友人と師弟の絆が純粋に深められるという修学効果は、田舎と都会の人の心あたたまる交流へと転化し、都会の感性で知的に洗練された作品群によって美化されたアートな旅路となる。来場者も迎える側もノスタルジアという幻想のなかの原風景の偽装工作に加担する甘い共犯関係にある。

しかし、芸術祭の開催地の住民たちは少子高齢化の「現実」に生きている。南市原で地域活動に参加する住民の感情は、ノスタルジアというよりも、むしろ子供の頃に培ったより具体性を持った「過去の記憶」を基層とする地域愛に近いのではなかろうか。地域の自然環境の記憶を共有する仲間たちが集い、協力し合い、子供の頃に見た風景を復活させる点で、一般の来場者が抱く抽象的なノスタルジアとは異なる立ち位置にある。通称「世界一大きなトイレ」の植栽を手入れする松本は、公園の花壇のようにならないように、自分の記憶にある南市原の野山の自然な雰囲気を出すように、切りすぎないように剪定と草刈りをしている³²⁾。里山連合会による小湊鉄道沿線の草刈りや菜の花の種まき、駅舎のイルミネーションなどの活動は、学生時代に利用した電車を廃線にさせたくない強い郷土愛がモチベーションになっている³³⁾。竹やぶが一掃される里山の整備は、誰の目にもその成果が見え、沿線で活動する各団体の面々は、それぞれの活動地域の駅舎の周辺環境の美化を競い合っている³⁴⁾。

芸術祭の開催期間中、来場者はひとときの滞在に日本の「田舎」の心地よさに浸る。広大な里山を巡り気づくことは、一つひとつの作品は、技術的な完成度も芸術性も高く内容も興味深い、全体の経験の一部でしかないことである。多くの作品をみる程に脳裏に残るのは、列車からの風景、作品にアテンドしている現地の人々の表情と対話の印象である。都市から訪れる来場者の抱く「幻想」と、現代アートの真価を問う「リアリティ」との乖離が、里山で展開する芸術祭には存在しつづけている。多くの来場者に違わず筆者は、失われた過去へのノスタルジアを投影して地方の芸術祭を体験し、少なからず都会の視線で田舎に対して抱く勝手な幻想によって日本の現代アートを内なる他者として受容しているのである。この居心地の悪さは、2018年の越後妻有アートトリエンナーレの開催場所の一つの廃校に足を踏み入れた瞬間に聞こえた大音量の中国語ニュースによって気づかされた。アテンドをしていたのは香港や台湾から駆けつけた学生達なのである。過去の記憶の中に日本の小学校の校舎と中国語の取り合わせがないため、違和感を覚え現実に引き戻されたのだ。現代の日本社会が向き合う人口減少と人材不足の問題は、都市よりも地方で一層深刻であり、居心地の悪さがつきまとうのは、現実の深刻さから逃げてきたつもりが捕まった感覚を「ふるさと」で得るからである。

減びゆく弱者に共感する作家や民俗学者は、地域文化の記録をせねばならぬ使命感を抱き、アーカイブが作家の表現手段としても学者の研究手段としても重用される。しかし、グローバル化のなかで、そもそも文化は死に絶えることはなく、常に変わりつづけるものとして地元住民の目線で捉えることも求められる³⁵⁾。地方の芸術祭は、再魔術化の連鎖やノスタルジアから脱し、文化と起業活動が連動し、どのような地域ビジョン（政策）が描けるか、もしくはどのような地域ビジョンと相乗効果を生むかにアートの真価が問われる。地域住民に愛される小湊鉄道も変化し続けている。公共交通機関は、地域経済のエンジンである。少子化する南市原から通学者の収益は望めないため、観光列車としての活路を見出し、ディーゼルエンジンのSLの機関車を据えた「里山トロッコ」の運行を2015年に開始した。地元は「里山トロッコ」を新たなマスコットのように受け入れ、現代人の心と時間の感覚をリセットする効果を深山は指摘する。

小湊鉄道、トロッコ列車は不思議だ。すごい力がある。実際に予約して乗ったが、乗り継ぎが悪くて一時間も待たされる。だが、皆が寛容になれる何かがある。誰一人文句を言わない、そうさせる力がある。乗っても、見送ってもトロッコ列車には皆が手を振る。自然に手を振りたくなくなる³⁶⁾。

小湊鉄道とその周辺の里山環境は、芸術祭以前から存在する「風景作品」であるが、地域とのつながりを維持しつつ時代の要請に呼应し変化しつづけている。現実と向き合い、行動に迫られる地域の



図5. 小湊鉄道と「撮り鉄」 撮影：筆者

当事者にとって、現代アートはノスタルジアを助長する人寄せ装置ではなく、表層的なアーカイブの手段でもなく、住民を扇動するカリスマでもなく、議論を拒む「赤ん坊のようなもの」でもない³⁷⁾。古典的な名作でも傑作でもないが、角度を変え向き合えば訳の分からないものでもなく、専門用語だらけの美術批評で人を疎外すべきものでもないが、今現在の表現の最前線を追求する作品には見る者に未来が託されていることを意識させる緊張感が走る。個人の作家がつくるアートは、場に託された時点で自由な可能性を秘めた流動的な存在でありつづける意味において、地域創生の即効性のあるツールではない。小湊鉄道が地域と外をつなげ新たなビジョンを掲げて変化しつづけていくように、地域に展開するアートの作り手も受容する人も、幻想とノスタルジアから脱し未来の風景を描く原動力になっていかななくてはならない。

第2回いちはらアート×ミックスは、大幅な予算削減によりオール市原の体制で住民たちも積極的に参加することになった。市民の当事者意識が培われた一方、月並みな市民文化祭に陥ってしまったことは否めず、作品の「インパクト」を欠くと県外と世界からの来場者は見込めないとの主催者の気付きもあった³⁸⁾。オリンピック開催の2020年に合わせて、再び北川を総合ディレクターに迎えて第3回いちはらアート×ミックスへの準備が進められているが、市原のつよみは、自ら行動する小湊鉄道沿線地域の住民の仲間意識と郷土愛であり、産（小湊鉄道株式会社他）官（市原市役所）学NPO（教員OBOG中心の里山連合会と地域リーダー）の連携にある。第2回いちはらアート×ミックス会場の旧里見小学校の一室では、元国語科教員の松本が招聘した画家前田麻里により、小湊鉄道と宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を重ね合わせた展示を作り上げた。展示手法は物語を基調とした素朴な手作りであり、複雑な展示技術や洗練した空間演出を伴う魔術性はないが、文学作品に着想を得た発想が面白く地域住民の共感と呼べる。誰もが共有できる日常性から対話を始め、小湊鉄道と銀河がつながるのであれば、今後さらに世界ともつなげたいとのビジョンも形成されるかもしれないし、銀河はどのようになっているのかを考え出せば科学と哲学の分野を横断したくもなる。分野と世代を超えた学びと想像と創造の世界が広がってくるのも現代アートの真価であり、脱ノスタルジアと現実課題に向き合う一歩ともなる。いちはらアート×ミックスは子供も大人も語らう機会をとおして、既成の枠に囚われないで柔軟に可変し続ける地域ビジョンを発想する可能性に満ちている。

4. むすびにかえて

「房総里山芸術祭いちはらアート×ミックス2020」の開催に先駆けた企画発表会が2019年11月25日に都内で実施された。第3回目は「房総の里山から世界を覗く」をテーマに、小湊鉄道の車両基地

を宇宙ステーションに見立て、60組ほど17の国と地域で活躍する作家たちが往来する夢のある企画になっている³⁹⁾。また、アートディレクターには千葉県を拠点に活動する豊福亮が参画している。小湊鉄道の全ての駅舎とその周辺がアートサイトになり、上総久保駅舎に計画されている西野達の“ホテル”に内外の注目が集まっており、何か「目玉になるもの」を希求しつづけてきた地元住民の声に応えた企画かもしれない。現代アートを、率直に評価する市民の視線は鋭さを増し、作品への期待が高まりつつあるが、魔術性を求めてはならないし、むしろどのようにホテルが機能していくのかに注目したい。

本稿ではノスタルジアを抱いて芸術祭に訪れる都市からの来場者と地元住民の潜在意識にある原風景に対する齟齬を指摘し、集客目的で作品の演出性を追求するあまりに再魔術化と合理化の矛盾が拡大する危険性を示唆した。いちほらアート×ミックスを事例に、地域における現代アートの真価を作家と地域住民の活動比較から問い、互いに協働し擦り合わせる身の丈の作品づくりを追った。地域住民と作家との関わりは、個々のプロジェクトによって多様で、その協働関係は当事者によって評価は異なるであろう。今後の研究課題としたい。また、現代アートのプロジェクトは、国際化し大規模になるほどに企画、構想、制作、実現、メンテナンスの全般において、地域外の専門家や資金調達にその多くを、中央政府、地域行政と都市コンサルタントに過度に依存しつづける体質も生みかねない。当事者である地域住民がどのようなビジョンを描くかが問われる。



図6. 小湊鉄道養老溪谷駅前を緑の森に戻す「逆開発」
ビジョン 撮影：筆者

1990年代以降のアートプロジェクトやソーシャリーエンゲージドアートをめぐりニコラ・ブリオが提唱した「関係性の美学」に対して、クレア・ビショップは、参加者にゆだねることで作家とアートの自律性が失われ、批判性を欠くことに警笛を鳴らしている⁴⁰⁾。つまり、社会的に良いことを盾に、アートプロジェクトのクオリティーは問われない。そうなると批評も欠き自己満足の傾向も出てくる。日本の里山で「機能する」アートに求められる議論の焦点は、もはやアートの自律性ではなく、地域内外の共犯者の意識転換と齟齬の擦り合わせと作品の自律的可変性であるようにおもう。地域は現状に危機感を抱き、将来ビジョンを描き戦略を立て前進しようとする一方で、都市からの来場者とともにすると作家たちもノスタルジアと幻想を抱えて日本の片田舎を訪れ、地域の素材発見と称した安易な掘り起こし作業はアートの後進性を印象づける陳腐な作品制作におちいりかねない。

小湊鉄道の養老溪谷駅前を緑に戻す「逆開発」は、合理的かつ前進性の地域/企業ビジョンの一貫として共有され、感傷的なノスタルジアとは本質的に異なる。しかし、幻想を持って都市からくる来

場者には、駅前の木立は遠い昔からの遺産のように映るであろう。日本人にとって馴染みのある地域の廃校や古民家を舞台とする芸術祭は、現代アートを広め若手作家の発表の好機ともなっているが、図らずもノスタルジアに依拠する奇妙な共犯関係も見え隠れしている。アートに地域経済振興の即効性は弱く、各地の芸術祭が継続することは想定しがたい。作家には、作品自体がどのように場と対話し、生き、いわば化学反応を起こし、自由に変化していくのか、自律性のある作品のあり方を批判的に問い考えつづける研究者としての視点と思考性も求められている。地域には、起業家としての作家の事業活動を抱え込むのであれば、異分野との連携を持ちつつ、多くの実験と失敗を許容して耐え、前進できる度量とレジリエンスのある仕組みが不可欠である。作家が奔放で無責任であるというよりも、新しい試みにおいては、意志決定や軌道修正、変更などのプロセスに自由な流動性があることが肝要で、これはビジョンの共有化なしには達成できないであろう。また、小湊鉄道沿線のメディア発信が高まるほどに、里山の乱開発を阻止するために環境保護施策の策定も急務である⁴¹⁾。アートインレジデンスを実施するのであれば、東京都内の作家スタジオ拠点と南市原をつなぐ発想を視野に入るとまちづくりにひろがりが見られる⁴²⁾。「世界に一番近い SATOYAMA」を掲げる市原の地の利も生かし成田と羽田国際空港と連携する広報活動も考えられる。

いちはらアート×ミックスを事例に、作家と住民による地域プロジェクトの相違を論じ、まずは両者の身の丈の協働のあり方を探り、ノスタルジアを触媒に繰り返される再魔術化に陥るアートの後進性と地域/企業ビジョンの前進性を擦り合わせるプロセスを要することを指摘した。昨年、市原市は台風15号によって被害を受け、小湊鉄道の一部区間の線路に土砂が流れ込み、復旧作業に3ヶ月かかり全線の開通は2020年1月末であった。第3回目の芸術祭を迎えるにあたり、小湊鉄道駅舎と沿線地域は中核を担いつづける。台風が、田舎に対する甘美なノスタルジアや幻想を打ち砕き、過酷な現実を突きつけるなかで、小さなローカル列車の走る光景は力つよく映り里山に希望をあたえる。地域ビジョンは希望から生まれ、共感を持って人々に浸透していく動的なエネルギーをとまなう。地域におけるアートの役割には、来場者と地域住民を巻き込み、自律的可変性によって機能してゆくことが試されている。自律的に変わり続ける地域のアートを誰に託すのか？試されているのは、作家と市原市民だけではない。南市原と小湊鉄道沿線地域、その場とその時を共有する共犯者たちには、未来を拓く宿題が課せられ、一人ひとりの意識転換に委ねられている。

謝辞

本調査にあたり、市原市役所の佐久間隆義前市長と芸術祭担当者と地元の地域リーダーたちからご理解とご協力を得られましたことに深く感謝いたします。いちはらアート×ミックスを支えた市役所の芸術祭担当職員の方々からのインタビューは匿名として掲載しました。公人以外で本稿に記載された個人名はご本人の了承を得て掲載しています。筆者からの度重なる取材にご対応くださった関係各位の皆様重ねて御礼申し上げます。2016年7月22日の聞き取り調査は、世界の水都研究者の石神隆法政大学名誉教授と水都共同研究者の服部充代氏の同行を賜りました。ここに感謝の意を表します。

注

- 1) 藤田直哉編著『地域アート 美学 制度 日本』堀之内出版、2016年。
- 2) アートによるまちづくりを考えたのは、市民によるギャラリーが増え「南市原ギャラリーマップ」が発行されたことが要因となっていることを市役所の当時の芸術祭担当者は指摘している。筆者は2015年5月27日に市原市市役所の芸術祭担当職員へのインタビューをした。また、2016年4月24日に実施した深山

文具店店長深山康彦へのインタビューによると、はじめは仲間たち「南いちほら応援団」と地域新聞を編集・発行し、紙面のギャラリー情報が増えたため別途2007年にギャラリーマップを作ることにしたとのことである。市原高校の美術教師で版画家の深澤幸雄の作品を所有する市民に呼びかけて、水と彫刻の美術館で展覧会「ぼくらの深澤幸雄展」を企画したこともあり、地域の市民による活動が芸術祭の開催前に実績としてあった。

- 3) 筆者による市原市役所の芸術祭担当者へのインタビュー、2016年7月22日、市原市役所分室
- 4) 市原市水と彫刻の丘は、1995年に高滝湖の湖畔に建てられ、2013年8月にリニューアルした。コンペによる審査と大規模な改修工事を経た新装開館にともない指定管理者は、観光協会からアートフロントギャラリーに移行した。
- 5) 市原市皆吉にアート・ギャラリーを運営する水と彫刻の丘の元館長新保育夫へのインタビュー、2016年4月26日、南市原、初回2014年アート×ミックスの数年前、2011年晩秋に小湊鉄道の各駅でイベントをする企画をアートフロントギャラリーに持ちかけ「アート漫遊 いちほら」が実現した。地元の団体と作家が協働して製作が進められた「アート漫遊 いちほら」について市原市役所発行の記者資料は次を参照。
https://www.city.ichihara.chiba.jp/sityoutop/seisaku/seisaku_hapyo/seisaku23/H231004.files/H231004-3-1.pdf (アクセス2019年12月25日)
- 6) 2016年4月26日の深山へのインタビュー。この千葉日報社で活躍してきた写真家の旧里見小学校での出展について伺った。また、芸術祭に組み込まれなかった小湊鉄道沿線のギャラリーは、会期中に自主企画で来た人を迎えた。お客さんが判断すれば良いとの深山のコメントは「現代アート」の本質を得ていた。
- 7) 筆者は2018年9月22日に実施された「花プロジェクト」の種まきに参加した。地元のガールスカウトの一行と一緒にバスで石神地域へ向かい、手渡された種の入ったペットボトルを振りながら畑の中を歩きつつ種を蒔いた。種まきの後、旧白鳥小学校の体育館に900名あまりの参加者たちが集まり、地域活動団体が作るカレーライスが振る舞われた。地元の老若男女、千葉大学園芸学部の留学生たちの一行もいた。市役所の芸術祭担当者の話では、食材費を調理担当の団体に市役所から支給し協力し合っている。会場では小湊鐵道株式会社社長石川晋平が挨拶し、市役所職員によるフラメンコの公演もあり、産官民が連携する構図ができていた。
- 8) 2016年7月22日の南市原への調査では、里山を手入れする南市原里山連合事務局長の松本靖彦の話では、花プロジェクトの方が市民の間で定着しているのに比べると、いちほら×アートミックスの広報活動が不十分であることも指摘していた。2014年いちほらアート×ミックスの開催期間中に、14もの地域活動団体からなる里山連合と市役所、小湊鉄道、加茂学園などが協力して「花プロジェクト」の一環である「花祭り」を開催し、芸術祭との相乗効果を狙った。
- 9) Michael North, "The Public as Sculpture: From Heavenly City to Mass Ornament," *Critical Inquiry* 16, no.4 (Summer, 1990): 862-66.
- 10) North, "Public as Sculpture," 867-68.
- 11) ボイスの《7000本の檜の木》プロジェクトにかかる額はおよそ1.68億ドル、誰でも石と木のセットを購入でき、その価格は210ドル。1984年に学芸員のルトガー・フックス (Rudi Fuchs) が世界の美術館に呼びかけて支援を依頼した。Dia美術財団の他に日本人からも購入・援助があった。George Baker and Christian Philip Muller, "A Balancing Act," *October* 82 (1997): 103-04.
- 12) Baker and Muller, "Balancing Act," 107.
- 13) Baker and Muller, "Balancing Act," 103.
- 14) 金田信一郎「逆開発～アスファルトの駅前を森に戻す」『日経ビジネス』2017年6月1日、<https://business.nikkei.com/atcl/report/16/053000139/053000002/>. (アクセス2019年12月25日)

- 15) Baker and Muller, "Balancing Act," 109.
- 16) 筆者による松本へのインタビュー、2016年3月25日、南市原；著者による深山へのインタビュー、2016年4月24日、南市原
- 17) 森遊会のホームページ <https://moriradio.amebaownd.com>（アクセス2019年12月25日）
- 18) 著者による深山へのインタビュー、2016年4月24日、南市原
- 19) 社会学者のマックス・ウェーバーは、近代社会において禁欲的プロテスタントの天職を全うする倫理観が、合理的な近代資本主義を生んだ過程を「脱魔術化」と形容した。脱魔術化は、呪術や伝統から解放され、宗教権威から労働生産性を追求する近代国家権力と資本主義へと移行する合理化を意味した。しかし、コーリン・キャンベルは、禁欲に対峙する人間の情動に着目し、商品そのものに付随する個人の幻想によって成り立つロマン主義的な魔術性を帯びた近代の消費文化の萌芽を洞察した。上記のウェーバーの「脱魔術化」、キャンベルによる消費体験における魔術化、リッツアの「再魔術化」、そしてボードリヤールによるシミュラクルを比較し論じている Per Ostergaard, James Fitchett, and Christian Jantzen "A Critique of the Ontology of Consumer enchantment," *Journal of Consumer Behaviour* 12 (2013): 337-344を参照のこと。
- 20) ジョージ・リッツアは、ウェーバーとキャンベルに依拠するとともに、ボードリヤールのシミュレーションによるスペクトルを引用し消費文化における「再魔術化」を論じている。ジョージ・リッツア『消費社会の魔術的体系ディズニーワールドからサイバーモールまで』山本徹夫 坂田恵美 訳、明石書店、2009年、120-138頁
- 21) 2015年5月27日の筆者による市原市役所の初回の芸術祭担当者へのインタビューによると、作家が市役所の担当者と直接に連絡し作業を進めたところ混乱が生じたため、一括してアートフロントギャラリーが作家と市役所との間に入るマネジメント体制になったとのことだった。作品は円滑に期限通りに「納品」でき、無事に初回の芸術祭を開催できたが、作家と地域住民との交流と共同制作の機会は十分に得られなかった。
- 22) 筆者による市原市役所の芸術祭担当者へのインタビュー、2015年5月27日、南市原
- 23) 筆者による松本へのインタビュー、2016年3月25日、南市原
- 24) 著者による深山へのインタビュー、2016年4月24日、南市原
- 25) Hal Foster, *The Return of the Real The Avant-Garde at the End of the Century* (Cambridge, Mass: The MIT Press, 1996), 196-97.
- 26) Nelson H.H. Graburn, "The Past in the Present in Japan, Nostalgia and neo-traditionalism in contemporary Japanese domestic tourism," In *Change in Tourism: People, Places, Processes*, ed. Richard Butler and Douglas Pearce (London and New York: Routledge, 1995), 50.
- 27) Olivia Angé and David Berliner ed. *Anthropology and Nostalgia* (NY and Oxford: Berghahn Books, 2015), 2-3.
- 28) Fred Davis, *Yearning for Yesterday: A Sociology of Nostalgia* (NY: Free Press, 1979).
- 29) 倉石信乃「中平卓馬と反ツーリズムの思考」『美術フォーラム21』30、2014年、84-88頁。
- 30) Jennifer Craik, "The Culture of Tourism." In *Touring Cultures, Transformations of Travel and Theory*, ed. Chris Rojek and John Urry (London and NY: Routledge, 1997), 114.
- 31) *ibid.*, 118.
- 32) 筆者による松本へのインタビュー、2016年3月25日、南市原
- 33) 筆者による松本へのインタビュー、2016年3月25日、南市原
- 34) 2017年12月に千葉大学にて実施された2017年度国際経営文化学会年次大会において、小湊鐵道株式会社社長石川晋平の講演によると、定期的に行われる里山連合会の集いでは、小湊鉄道沿線の整備に携わる

住民たちが互いの地区の活動成果を自慢しあう光景が毎回見られることが伝えられた。

- 35) David Berliner, "Are Anthropologists Nostalgist?" In *Anthropology and Nostalgia*, ed. Olivia Ange and David Berliner (NY and Oxford: Berghahn Books, 2015).
- 36) 著者による深山へのインタビュー、2016年4月24日、南市原
- 37) 第1回中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックスに携わった当時市原市役所経済部部長石井賢二は「北川さんは [アートは赤ん坊のようなもの] とおっしゃっていますが、アートをみんなで守って、成長させていく過程がまちづくりに繋がって行く。今回はそれができたのではないかと感じています。」と座談会で語っている。北川フラム/中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックス実行委員会 監修『中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックス』現代企画室 2014年 100頁。
- 38) 著者による市原市役所の芸術祭担当へのインタビュー、2018年9月22日、南市原
- 39) 会場にて配布された企画発表資料「房総里山芸術祭いちほらアート×ミックス2020」2019年11月25日現在
- 40) Nicolas Bourriaud, *Relational Aesthetics* (Dijon: Les presses du Réel, 2002 [1998]); Claire Bishop, *Artificial Hells, Participatory Art and the Politics of Spectatorship* (London and NY: Verso, 2012) 大森俊克訳『人工地獄：現代アートと観客の政治学』フィルムアート社、2016年。
- 41) 市原市役所の芸術祭担当者との対話、法政大学名誉教授石神隆のコメント、2016年7月22日、市原市役所分室
- 42) 市原市役所の芸術祭担当者との対話、水都研究者服部光代のコメント、2016年7月22日、市原市役所分室

参考文献

- Angé, Olivia, and David Berliner ed.. *Anthropology and Nostalgia*. NY and Oxford: Berghahn Books, 2015.
- Baker, George, and Christian Philip Muller. "A Balancing Act." *October* 82 (Autumn 1997): 94-118.
- Berliner, David. "Are Anthropologists Nostalgist?" In *Anthropology and Nostalgia*. ed. Olivia Ange and David Berliner, NY and Oxford: Berghahn Books, 2015.
- Bishop, Claire. *Artificial Hells, Participatory Art and the Politics of Spectatorship*. London and NY: Verso, 2012. (大森俊克訳『人工地獄：現代アートと観客の政治学』フィルムアート社2016年)
- Bourriaud, Nicolas. *Relational Aesthetics*. Dijon: Les presses du Réel, 2002 [1998].
- Bryman, Alan. *The Disneyization of Society*. London: SAGE Publications Ltd, 2004. (能登路雅子監修、森岡洋二訳『ディズニー化する社会 文化・消費・労働とグローバリゼーション』明石書店 2008年)
- Craik, Jennifer. "The Culture of Tourism." In *Touring Cultures, Transformations of Travel and Theory*. ed. Chris Rojek and John Urry, London and NY: Routledge, 1997.
- Davis, Fred. *Yearning for Yesterday: A Sociology of Nostalgia*. NY: Free Press, 1979.
- Foster, Hal. *The Return of the Real The Avant-Garde at the End of the Century*. Cambridge, Mass: The MIT Press, 1996.
- Graburn, Nelson H.H.. "The Past in the Present in Japan, Nostalgia and neo-traditionalism in contemporary Japanese domestic tourism." In *Change in Tourism: People, Places, Processes*. ed. Richard Butler and Douglas Pearce, London and New York: Routledge, 1995.
- いちほらアート×ミックス実行委員会監修『いちほらアート×ミックス』美術出版社 2017年
- いちほらアート×ミックス実行委員会『ICHIHARA ART × MIX 2017 事業報告書』2017年11月1日

- 加治屋健司「アートプロジェクトと日本 アートのアーキテクチャを考える」『広島アートプロジェクト』広島アートプロジェクト2009年
- 金谷信子「瀬戸内国際芸術祭における公民パートナーシップ—その利点と課題—」『広島国際研究』第20巻 2014年75-91頁
- 金田信一郎「逆開発～アスファルトの駅前を森に戻す」『日経ビジネス』2017年6月1日 <https://business.nikkei.com/atcl/report/16/053000139/053000002/>. (アクセス2019年12月25日) .
- 木下直之『美術という見世物 油絵茶屋の時代』ちくま文芸文庫 1993年
- 小泉元宏「地域社会に「アートプロジェクト」は必要か? 接触領域としての地域型アートプロジェクト」『地域学論集』第9巻 第2号 2012年77-93頁
- 倉石信乃「中平卓馬と反ツーリズムの思考」『美術フォーラム21』Vol.30, 2014年84-88頁
- 北川フラム/中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス実行委員会監修『中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス2014』現代企画室 2014年
- 中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス実行委員会『中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス総括報告書』2014年
- North, Michael. "The Public as Sculpture: From Heavenly City to Mass Ornament." *Critical Inquiry* 16, no.4 (Summer, 1990): 860-79.
- Ostergaard, Per, James Fitchett, and Christian Jantzen. "A Critique of the Ontology of Consumer enchantment." *Journal of Consumer Behaviour* 12 (2013): 337-344.
- Ritzer, George. *Enchanting a Disenchanted World: Revolutionizing the Means of Consumption*. Pine Forge Press, 2005. (山本徹夫・坂田恵美訳『消費社会の魔術的体系 デイズニールワールドからサイバーモールまで』明石書店 2009年)
- 澤村明編著『アートは地域を変えたか 越後妻有大地の芸術祭の十三年2000-2012』慶應義塾大学出版会 2014年
- 須藤廣『ツーリズムとポストモダン社会 後期近代における観光の両義性』明石書店 2012年
- 須藤廣『観光化する社会 観光社会学の理論と応用』ナカニシヤ出版 2008年
- 藤田直哉編著『地域アート 美学 制度 日本』堀之内出版 2016年
- 村山元英『国際地方学 “ちば” 実験』文真堂 1985年
- 柳田國男『日本の祭り』創元社 1953年
- 吉澤弥生『芸術は社会を変えるか?』青弓社 2011年
- 吉田隆之「芸術祭の地域コミュニティ形成への影響：いちはら×アートミックスを事例に」『アートマネジメント研究』第19号 2018年7-21頁